

## 今日のみことば

### □ 12月4日(日) マルコ 12章

一人の学者に一番大切な戒めを問われて、主は儀式や外的莊重さではなく心を尽くし、力を尽くして神と人を愛することだと教えられた。心底からそこに生きるよう警告もされた。

### □ 12月5日(月) マルコ 13章

主の再臨の時は近い。時のしるしがあることを示している。だから「人の子が戸口まで近づいていることを知」らなければならない。

### □ 12月6日(火) マルコ 14章

主は、十字架上で多くの人の贖いとして、ご自分のいのちをささぐべき時が近づいていることを知っておられた。記念すべき過越の食事を通して、これをさらに意義あるものとされた。

### □ 12月7日(水) マルコ 15章

主は十字架上で一人の盗賊を救いに導かれながら、なぜご自身を救われなかったのか。主にそれは出来た。主は私たちが罪から贖うために死ななければならなかった。

### □ 12月8日(木) マルコ 16章

主イエスの死体を納めた墓は空っぽであった。主イエスは一度死なれた。しかし今よみがえって生きておられる。死に打ち勝たれたのです。

### □ 12月9日(金) ルカ 1章

主の使いが、イエスのいとこ、ヨハネが生まれることを預言した。その後まもなく、天使は、マリヤにイエスを宿すことになると告げる。

### □ 12月10日(土) ルカ 2章

イエスはベツレヘムでお生まれになった。少年になったときイエスは、神殿の中で、教師、祭司たちと話し合われた。彼らはイエスの理解力に驚きました。

---

ろ ぼ No. 1792  
2016年 12月 4日  
日本バプテスト 立川キリスト教会  
牧師 大川 博之

---

使徒言行録 6:9

その夜、パウロは幻を見た。その中で一人のマケドニア人が立って、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と言ってパウロに願った。

理解することが出来るのです。それがクリスチャンの有り様なのです。ロティーは中国での働きでとても働き人の必要を感じて、母国に幾度か手紙を書きましたが、なかなかその願いを叶えられることはありませんでした。思いはあっても、決心してもその足を一步出すことに躊躇させられるのでした。それが人間ですが、クリスチャンとしては欠けています。

マザー・テレサの活動の様子を五年間にわたって写しつづけてきた沖守弘さんは、彼女の力のもとをこう語りました。「マザーはいつもかならず、聖書かロザリオをもっています。彼女の象徴です。毎朝四時から六時まで黙想とミサ。これが彼女の

「世界バプテスト祈禱週間」の源流は「ロティー・ムーン・クリスマス献金」です。ロティー・ムーンの主の福音宣教に対する熱情をしっかりと受け継ぐべき日であろうと思っています。彼女の墓碑に書かれた「1840年から1912年、40年間中国に伝道した南部バプテストの宣教師・死に至るまで忠実な者」との言葉は、しっかりと刻みつけられました。

私たちは主イエスが、最後にお命じになった「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」(マルコ16:15)との言葉を、生きているかと問われなければなりません。イエスの教えは理解するだけでは、何の役にもたちません。それを生きて初めて、私たちは神の御心をしっかり

活動の原点、原動力なんですね」と。マザーはこの仕事をしている理由をこうのべています。「福祉事業、慈善事業のためにやっているのではありません。神のためにやっているのです。なぜ、死にかけた人を手厚くもてなすという事ができるかといえますと、キリストに仕えようと思えばなんでもできます」と

私たちはもう一度、アンテオケ教会の人たちが、町の人たちからどうしてクリスチャンと呼ばれるようになったかを思い出さなければなりません。

私たちはキリストに仕えようとして毎日を過ごしているのでしょうか。クリスマスはしっかりと私たちにこのことを問いかけてきます。パウロは回心してからは、キリストのために生きてきました。その伝道旅行はびっしりでした。聖書を読むときそのスケジュールは彼自身によるものと言うより、神のご計画によったものであったのか、とも思っています。トロアスに導かれ、そこで幻のうちにマケドニヤへの道が開かれました。

新しい土地への伝道の一步を踏み出したのでした。もうこの頃では、パウロはその働きの意味は十分に受け止めていました「マケドニヤ渡ってきて、私たちを助けて下さい」との声にパウロは答えて海を渡りました。そしてピリピから始まって、テサロニケ、ベレアへとその働きは広がっていったのでした。今連盟が派遣している宣教師たちも、当地の求めに応じて送り出された人たちです。私たちは主の呼びかけ「主よ、私はここにおります」と答えるのです。

————— 《 聖書の学び・祈祷会 》 —————

詩篇 107 主に感謝せよ

この詩篇には、さまざまの災いから救い出された事例が記されており、主なる神の救いの恵みをさんびしている。

これらの主題を、迷う旅人（4-9）、囚人（10-16）、病人（17-22）、船員（23-32）の比喻として歌いました。環境は各々と異なっていますが、みな同じ経験をしています。

すなわち、彼らがその必要を神に叫び求めたとき、神はそれを聞き、答えて下さいました。すべての人が、神を讃美する同じ原因を持っています。病気の時でも、嵐に出会った船の中でも、凶作に困っているときでも、貧しさの苦しみの中においても、神に呼び求める者に対して、神はそれを放ったらかしにはしておかれませんか。ご自分の民を取り扱われる変わらない神の愛に「知恵ある人は皆、これらのことを心に納め／主の慈しみに目を注ぐがよい」と言うのです。主に贖われた私たちは、証しをしないではおられないのです。



Read God's Word.